

Title	キルケゴール青年時代の研究
Sub Title	Studier i S. Kierkegaards Ungdomstid
Author	大谷, 愛人(Otani, Hidehito)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1970
Jtitle	哲學 No.55 (1970. 3) ,p.213- 226
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	博士学位論文審査の結果の要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000055-0213

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

《博士学位論文審査の結果の要旨》

キルケゴール青年時代の研究

大 谷 愛 人

内 容 の 要 旨

この論文は、キルケゴールの思想の基礎的構図ができあがった青年時代におけるその生成過程についての研究であるが、この研究の根本意図は、この研究を通じて、日本におけるキルケゴール研究の歴史と現況が根本的にかかえている課題に応えようとする点にある。即ち、日本のキルケゴール研究は、歴史の古さ（＝明治三九年＝一九〇六年）においても文献類（翻訳書も含む）の数量においても、デンマーク本国を別とするなら、ドイツに匹敵する程である。ところが、それ程多数の文献も、その殆んどが、二、三のドイツ語文献を参照してとりまとめた作文程度のものであり、「研究文献」の名に値するものは殆んど見られない。そこでこの論文は、そのような日本の学界の現状に、本格的な「基礎的研究」の礎石を捉えるつもりで書かれた。

ところで、本格的な「基礎的研究」であるためには、次の二点が、最低の条件として充されていなければならない。この論文は、それを充すことによって、否、それを充することをこそ主目的として書かれた。

第一は、デンマーク語文献（＝原典、資料、その他の研究文献という意味）を主体とした北欧語文献（デンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語）に基き、しかも徹底的に「第一資料」に基くこと。この論文は、このテーマに関連するデンマーク語文献はのこりなく用い、デンマーク語「第一資料」も殆どのこりなく用いた。例えば、キルケゴールの通った

教会の書類（その一例として聖餐式名簿など）、ラテン語学校や大学の内申書や証明書類、学友たちや親族の者たちが彼について書いた書簡や手記、同時代の新聞記事、キルケゴール家の何代にもわたる詳しい系図、キルケゴール自身の蔵書目録など。こうしてこの論文は、いかなることも必ず「第一資料」の裏付けで書かれている。例えば、この論文の主要作業は、彼の思想の生成過程を究明するにあたって、たえず他の思想家たちの影響を検討することであったが、その際彼がその思想家の著作をどのように読んでいたのかを知るために、その都度必ず、まず彼自身の「蔵書目録」を検討することからはじめる方法をとっている。

第二は、歴史的状況への相即ということ。キルケゴールの思想を同時代のデンマークの歴史的状況と切り離して考察することはナンセンスに過ぎない。というのは、彼の思想は、同時代デンマークの歴史的状況からの「二重の規定」をうけることを通じて生成したものだからである。即ち、彼の思想の或る部分や或る面は、同時代のデンマークの歴史的状況の中から直接に生れ成長したものであるが、基本的には、その状況への批判、或は反抗において生れ成長したものである。彼の無限に深い思考と精神は、同時代の思想や精神を、同時代の誰よりも多くまた深く呼吸し、また、誰よりも深く根本的に批判を行ったのである。このように、彼の思想は、時代から「二重の規定」をうけていることを考えるとき、彼の思想を、歴史的状況から切り離して扱うことはナンセンスに過ぎない。しかし「歴史的状況への相即」と言っても、彼の思想の根源の一切を悉く当時の歴史的状況の中に求めようとする唯物史観の立場ではなく、「たえず同時代の歴史的背景を顧りみつつ」という資料的実証性を重視する立場である。この意味において、この論文の全体は、三部に分けられ、第一部は「歴史的背景」として、本論文全体のデンマーク的的前提が究明され、第二部は「少年時代」として、彼の個人的（心理的）前提が究明され、このような準備のもとで、第三部（青年時代）に入るようになっている。しかしこの第三部に

おいても、これらの背景が顧みられながら、更に、彼の個々の思想のこまかい背景が徹底的に検討されながら、彼の「精神」の闘いの過程が究明される。

この論文は以上の二点を特徴とすることによって「基礎的研究」の目的を果そうとするものである。

論 文 審 査 の 要 旨

キルケゴール青年時代の研究

まえがき

セーレン、キルケゴール（1813—1855）の生涯、思想について、日本で最初に著作されたものは故和辻哲郎博士の「セーレン・キルケゴール」（大正4年、1915年刊）であった。当時世界的に見てもこの書だけの分量をもつものはきわめてすくなかったが、博士は主としてクリスチャン・シュレンプフの独訳書によったのであるが、この独訳はデンマーク語の原文に忠実でない部分が多いと見られている。その後E・ヒルシュの独訳書（1933年以後24巻）とともに、すぐれた研究書が刊行され、キルケゴールにかんする関心は世界的に高められたが、その多くはキルケゴールが1848年彼のおびただしい著作にかんする自叙伝風の叙述である『わが著作活動の視点』（この書は彼の死後1859年に刊行された）にしたがって殆んど伝統的な研究の図型を定めたものが多かった。

本学位請求論文「キルケゴール青年時代の研究」は全く従来の図型によらず、筆者のデンマーク留学を利用して手にしたおびただしい関係書、雑誌類その他とともに、デンマークで刊行された原典35巻中におさめられたおびただしい手記の集積である彼の「日誌」（全巻中じつに20巻を占めている）について、独自の問題設定によって新しい研究の照明をあてた。提出論文は2巻総頁1,640頁に及ぶ大部のものである。その分量においての

みでなく、キルケゴールの思想的背景、少年時代、青年時代についての詳細なこのような研究書は西洋においてもまだ類書を見ることができない。

2. 本論文の構成上の特色

(1) 方法上の特色

この論文の方法上の特色としては次の2点があげられる。

第1は、基礎資料、或は第1資料中心主義をとったこと、即ちデンマーク語資料、文献中心主義をとったことである。例えば資料の1例をあげると、キルケゴール家の何代にもわたる詳しい系図、キルケゴールの父母の子供時代の教会の記録、キルケゴールが通った教会関係の書類、ラテン語学校の学友たちが彼の少年時代について書いた書翰や手記、ラテン語学校や大学の内申書や証明類、大学の学事記録、聴講者名簿、神学国家試験にかんする記録、マギスター学位論文の審査過程にかんする記録、王立牧師養成所時代の説教演習の記録、キルケゴール自身の大学での聴講ノート、彼の少年時代からの書翰や手記、彼の親族の者たちの手記、彼自身の「蔵書目録」、同時代のさまざまな新聞記事等である。

第2は、この第1と表裏の関係をなすものであるが、それは歴史的状況への相即ということである。キルケゴールの思想は同時代デンマークの歴史的社会状況を離れて考えられない。彼は自分の町、自分の時代、そして自分の母国語から決して離れようとはしなかった。しかし彼は一面においては彼の時代に徹底的に規定されながら、他面においては時代に徹底的な「批判」を行なった。(彼に「現代の批判」のある所以である)。即ち彼の天才的な鋭敏な精神は、時代を同時代の誰よりも敏感に感じとり、誰よりも深く呼吸したが、それと同時に誰よりも鋭く批判し、誰よりも徹底的に闘ったのである。

さて、このような方法的見地に立って筆者は論文の第1部(論文は3部よりなる)として、この論文全体の「歴史的背景」を究明するために多量の

頁を費している。即ち「(政治を中心として見た一般の) 歴史的状況」「教会史的状況」「思想史的状況」の三つに分けて記述し、第1部は第2、第3部の全体的背景となり、第2、第3部の中の個々の事項はそれぞれの個所で、この第1部の内容との関連をたえずつきとめつつその重要度に従って更に詳細にするという方法をとっている。

第2部は「少年時代」になっているが、これは彼の思想が成立するための個人的心理的前提出を明らかにしておくためである。そのために筆者は従来の研究が空白に近い形にしていた部分を充たすために多くの資料をあさった。即ち、彼の両親に関する資料、彼の誕生のときの教会における幼児洗礼の模様にかんする資料、ラテン語学校及びそこで彼の生活にかんする資料、彼が受けた宗教教育にかんする資料、彼が15才のとき兄に書いた2通の長文の手紙などを訳出している。

最後にこの論文の究極的課題である青年時代が第3部としてとり扱われる。ここでは彼の「学問研究」が主となり、それに伴って彼と他の多くの思想家との関係がとり上げられる。まず彼自身の「蔵書目録」を検討することからはじめ、彼のノートや日誌へと考察をすすめていくという手続をとっている。そのため大学入学時にラテン語学校から送られてきた内申書、大学第1学年の成績証明書、聴講ノート、王立牧師養成所時代の説教演習にかんする記録、神学国家試験のときの問題や記録、マギスター学位論文の審査の過程や答弁にかんする記録など訳出公開している。

(2) 内容上の特色

まずこの論文はキルケゴーの思想と生活を通じ、何が「問題」とされたのかという点を明らかにしようとする。即ち彼の思想と生活はわれわれの眼にするものよりさらに高次の立場から見るならばいったい何を意味しているのか、つまりそれらを通じてどんな「問題」が提起されているのか、ということである。この論文の全体はまさにこのような設問をふまえた視角から構成されたものといってよい。ところでこの論文の第1部「歴

史的背景」では当時のデンマーク国家及び社会の体制が崩壊していく過程が詳述されているが、それはこの体制と表裏の関係にある「既存の価値体系」の保持者である「教会」の状況を通じて「価値体系の崩壊過程」の特色が記述されている。このような歴史的状況と価値的状況がデンマーク人特有の気質とも相俟って同時代者の内部に形成した「精神的状況」がメランコリー、或は「憂鬱」を形づくる。これを背景として第2部はキルケゴールが少年時代にひそかに受けとめていた問題は何であったかを指摘する。それは「真理」そのものへの根源的な問い合わせであり、それは人間・歴史・文化を支える「真理」はいずこに求められ、また何であるかという問い合わせである。

次にこの論文の主題の眼目ともいるべき第3部は彼の青年時代についての開明である。何より重要な問題は、上述した根源的な「問い合わせ」にたいする彼の回答、或は解答への努力が深いうねりをもった「秘密」をもっていることである。従来のキルケゴール研究はこの深いうねりをもった「秘密」について極めて不確かな根拠の上にしか立論してなかった。筆者によれば、その理由は、彼自身が青年時代の基礎資料となる彼の日誌、ノート、作品、書翰などにさまざまの偽装をこらし、自分の「秘密」が誰にもわからないように最大な努力を傾けていたからだという。筆者はキルケゴールに2種類の秘密のあることをその根本資料から見出す。その1は「根本的の秘密」ともいるべきもので、これが中心になって、その前後に沢山の「小さな秘密」の連続の線が見られる。その根本的の秘密とはいわゆる「大地震の体験」と呼ばれるものである。彼の青年時代の全時期は、これを中心として成立しており、これを中心としてはじめて全体の意味づけが可能となるといえる。従って筆者は先ずこの秘密が「何時」、「如何にして」起り、「何であるか」を明らかにしなければならないと考える。したがって第2部と、第3部の内容上の特色は次のようになる。

第1に彼の少年時代において彼特有の「憂鬱」が彼の内部にどのように

して決定的に刻印されたかが徹底的に究明されねばならない。そして彼の精神は自分の中に奥深くかかえた「憂鬱」から脱出することの闘いに運命づけられることになるが、その闘いの中に「時代」の「憂鬱」が入りこんでくるため、彼は自分の問題性を「時代」が提起している問題とからませて、可能な限りの深味から検証することを企てる。これが彼の青年時代の特色であり、その秘密であった。

第2に、このような意味での検証が行われた最初の時期が1835年の夏休を中心とした前後の時期である。筆者は、1835年8月1日付の彼の手記からその重要な意味を探り出そうとする。このことを従来のキルケゴール研究者はあまりやらなかったというのである。

第3に、こうして彼の青年時代については、彼のファウスト的な真理実験の旅が問題になる。このような真理に向って浄化し上昇しようとする彼の旅はいったいどうなることであろう。彼の行きつくところはどうなったのかということが問題にされる。彼はその頃は多分に文学的であり、ファウスト的な「真理実験」をも気分的に受けとめていた。つまりややゆとりのある冒險的気分で出発したものの、時がたつにつれて、本格的に泥沼に入るようになり、翌1836年4月頃には、自らを「アハスヴェルス」的状況として意識しはじめる。そしてこのことを決定的にまで自覚するに至ったのが、P.M. メーラーとの関係であり、その問題の所在を決定的に示されるに至ったのがG. ハーマンとの関係においてであった。こうしてこれから彼の文学活動、哲学研究、そして生活の一切はこの状況から脱出することにむけられるが、そのようにもがけばもがく程、ますます絶望の深みに落ち入り、生存の最低の状況にまで沈みこんだ。ところがこの極に達した頃、「大転換」をむかえる。その大転換の時期の決定的な出来事が有名な「大地震の体験」という根本的祕密に関する出来事となる旨を筆者は詳述する。

第4に、この論文は、彼の根本的祕密に関する出来事を「大地震の体験」

とし、これが1838年5月5日に起ったと推定するための資料的文献的裏付けをするために筆者は多量のエネルギーを注いだと思われる。この「大地震の体験」こそはキルケゴールの青年時代の全体の解釈と時期区分について重大な意義をもつものなのである。筆者はこの「大地震」の期日、内容に関する過去の学説の中のいかなるものをも逃さないように心がけ、結局のところもっとも精密な「大地震研究史」を編纂したといえる。

第5に、従って従来いかなる国のかる研究においても殆んど不間にされていた1838年の5月から1841年10月の学位論文通過、ついでレギーネとの別離までに至る時期の過程の意味がこの論文によって明白になった。とくに1838年9月上旬、つまり父ミカエルの死後1カ月して刊行された処女作品『いまなお生けるものの手記より』の刊行のテーマと内容の大きな謎が明らかになった。この論文の第10章はこの謎を解明するためにとり組んだものである。即ちこの作品にかんしては3つの大きな謎があったと筆者はいう。「何故これが突如1838年9月上旬に刊行されたか」「この書名は何を意味しているのか」「これが処女作品であるならば人を圧するようなテーマが選ばれて然るべきなのに、当時では全くひ弱な文学青年アンデルセンがとりあげられたのは何故か」という点の解明である。

(3) 本論文の梗概

本論文の梗概については、すでに2「方法の特色」、3「内容上の特色」の項において相当に述べてきたので、ここでは本論文審査上重要と思われる事項にかんし、前述した部分と重複しない限度で簡略に述べることにする。

まず第1部歴史的背景については意図されていることが2つある。1つは同時代デンマークの歴史的・教会史的・思想史的領域に見られる特殊事情についての客観的叙述であり、他の1つはこれら3つの領域を通じて成立している「精神」的意義の究明である。まず政治的状況にかんしてデンマークはナポレオン戦争にまきこまれ結局フランス側についてしまったた

め、ウィーン会議の結果一気に今日の規模の最小国になってしまった。そこで今まで外にばかり向けていた眼を内に向けざるを得なくなった。1814年という年は今日にまで通じるデンマークの歴史的運命を決定した年になった。ところでこの年はキルケゴールの生れた翌年にあたる。さてその後経済も復興して1830年をすぎると7月革命の波がデンマークにも押しよせ自由主義的政治運動が起りはじめ、明らかに1830年を境としてデンマークは「経済の時代」から「政治の時代」へと入って行った。この1830年はキルケゴールがコペンハーゲン大学に入った年である。こうして自由主義運動は徐々に盛んになり、1834年地方議会の設立、更に1848年には「絶対王政」の撤廃、1849年には「自由憲法」の施行となり民主主義的議会政治が確立した。かくて社会的には「市民階級」が登場し、更にデンマーク全人口の85パーセントを占める「農民階級」が登場し、絶対王政下の社会の縦構造は水平化の過程を迎る。しかしこれはその縦構造を背景として立っていた価値体系が崩壊したことを意味する。この実際の証左は教会史的状況の中で現われている。1849年「国家教会」は「国民教会」へと変革し、政治とは分離された。そして知識階級を中心とした神学と農民を中心とした信仰とが大きくクローズ・アップされるようになった。それは「価値体系の所有権」が国民のひとりひとりの手に移ったことを意味する。ところでこのような「価値体系の崩壊」の状況は、詩人や思想家の中にいっそうはっきりと現わされてくる。そこで次の「思想史状況」の章で筆者はこの問題を追求する。この章では同時代のデンマークの文学界と思想界は、ドイツ・ロマンティックの影響を受け、デンマーク人の精神を動かすことによってデンマーク・ロマンティックという特有の思想が生れデンマークを風靡する。そしてそれを通じて成立している同時代の精神的状況がゲーテの「ファウスト的状況」であることをとくに究明する。それは「懷疑」の状況である。しかしこのゲーテの「ファウスト的状況」はその真相が更に実存的に深刻なものとなり、その正体が「アハスヴェルス（永遠のユダヤ人）」的

状況」であることが明らかになる。つまり絶望の状況である。筆者は以上3つの領域を通じ「価値体系の崩壊」の状況を検討しているが、それと同時にまた「新しい価値体系」を求めようとする運動の3つの方向があったことを指摘している。1つは自由主義運動につらなる人々で、彼らは「新しい価値体系」は「大衆」の内部にあると考えた。次は文学者・思想家たちで、それを個人としての「人間」の内部に求めようとした。もう1つはキリスト教界の動きで、それを新約聖書の内部に求めようとした。キルケゴールはまさにこの3番目の方向にもっとも徹底的につき進んだのである。何故それは彼のみに可能だったろうか。それは彼が同時代の精神的状況をもっとも深く呼吸し、もっとも深く批判する精神をもっていたからであると筆者はいう。

第2部少年時代では1813年の誕生から1830年のラテン語学校卒業までの時期が扱われる。彼の少年時代は家庭生活と偉大な校長メーラーのもとでのラテン語学校生活として営まれた。しかし少年時代には2つの因子が彼を支配していた。それは父ミカエルの秘密とそれにからまる信仰、それに渦巻するあまりに過度な宗教生活である。そしてこの2つの因子がキルケゴールの内部に彼の個人的心理的特質としての「憂鬱」を刻印することになる。問題はこの「憂鬱」にある。それは単なる心理的メランコリーではなく、キリスト教教育がつくり出したものだという点である。彼の憂鬱はキリスト教の真理が深くきざんだ轍のようなものである。つまり彼の憂鬱はそれを貫徹していくとキリスト教の最深部へつながって行くよう性格付けられたものだった。彼はこのような性格をになって青年時代に入るのである。

この第3部青年時代の研究は筆者のもっとも精力を注いだ部分であって叙述の量も一巻に余るものとなった。ここで主たる研究素材となったものはキルケゴール自身の「学問研究」である。従って第3部では彼の「学問研究」の内容と移行の状態が詳細に究明されている。

キルケゴールの青年時代には 2 つの大きな転換期がある。1835年の夏と 1838年の春から夏にかけての 2 時期である。即ち 1830 年 11 月 コペンハーゲン大学へ入学したキルケゴールは、基礎学科修得のための第 1 年目を終了し、翌 1831 年 11 月 1 日 父ミカエルの願いであった神学部への在籍を決定し、最初のうちは本気で勉強にうちこんでいたが、そのうちキリスト教への「懷疑」がわいてきた。その大きな理由は 1832 年から 34 年にかけて死の不幸が彼の一家を襲ったことである。父ミカエルは先妻、後妻、そして 7 人の子供の中 5 人まで失い、残るは兄ペーダーと彼だけになり、結局キルケゴール家では父を除いては 33 才以上は生きられないという事実を見せつけられたこと、のみならずそれを自らの罪に帰し絶望的な祈りをささげている父ミカエルの秘密と正体にふれたことである。こうして彼は 1834 年頃から、同時代を支配していた 3 つの神学思想、即ち オーソドックス神学、合理主義神学、グランドヴィ主義にたいする激しい批判を日誌に書くようになった。しかも彼は 1834 年頃から文学活動を活発に行うようになった。

このような状況では神学国家試験はとうてい受けられるはずがない。それを受けたためには彼自身キリスト教の真理への確固とした信仰をもっていなければならない。そこでこの「懷疑」の状況を開拓しようとして、キリスト教の真理とは何なのかをあらためて問い合わせざるを得なくなつた。そしてそれを行つたのが 1835 年の夏休みであった。この夏休み中の思索によって第 1 の大転換が行わるのである。その思索の集約は有名な 8 月 1 日の手記に書かれているが、この手記こそ彼の生活の方向をはっきり宣言したものにほかならない。筆者はこの手記を重要な資料としているが、日本ではこの手記の全文が充分問題にされず極めて平面的な解釈で素通りしてきた。8 月 1 日の手記が示しているものは次の 3 点であると筆者は考える。第 1 は、真理とはどういうものでなければならないかの認識、第 2 は、自分は少くともそのような真理、つまりキリスト教の真理を自分のものとしていないことの確認と告白、第 3 は、いま自分の緊急課題は「神は自分

が何を為すべきことを欲しているのか」をつきとめることの3点である。ところがこの第3について彼は神は自分が父の願いの通りに神学国家試験を受けて牧師となることを真に欲しておられるかどうかを「実験」にかけて見ようとした。このように懷疑を貫徹することを通じて真理実験を行うことはファウスト的立場であり、彼は明らかに自らをファウストとして意識し、その真理実験の旅に出ることをはっきりと述べている。

次の大転換には P. M. メーラーと G. ハーマンが関係してくる。両者は彼がアハスヴェルスであること、「アハスヴェルス的状況」とはどういうものであるか、それから脱出しようとするならどうあらねばならないかを教えてくれる。しかし彼がもがけばもがくほどアハスヴェルスとなって行き、いくたびか自殺を試みる気持になる。しかし1838年春から夏にかけて大転換が起こる。それは新約翌書にただようユーモアが、その真理を開き示したことである。しかしその大転換を最もよく示したものが「大地震の体験」を通じての彼の使命の実感、父ミカエルのいたましい死による使命の実践決意である。その転換の中心軸は彼の満25才の誕生日1838年5月5日にあると推測される。それが「大地震の体験」である。この大転換がどんなに決定的なものであったかは、その後の彼の生活、とりわけ神学国家試験の受験自体、「ユトランドの旅」「マギスター学位論文」、そして何よりも「レギーネ・オルセンとの婚約破棄」の関係がこれを語っている。ここで筆者は筆を描いている。

(4) 結 論

筆者は上述したように日本はもちろん西洋においても容易に手にできない資料をあさって従来キルケゴールにかんしてあまり顧みられなかったデンマークの歴史的状況、とくにその思想史的特色に注目して、キルケゴールの思想の中核をなしている「憂鬱」をその時代の性格と結びつけ、それを背景として彼の少年時代と青年時代の性格形成、思想形成の過程を追求した功績は高く見るべきである。従来のキルケゴール研究では少年時代は

殆んど注意されず、彼の思想を主として壮年期（1840年以後）の著作によって探るのが常であった。彼の青年時代についても同様である。筆者は彼の青年時代の解明に最も大きな精力を払っているが、西洋とくにキルケゴー尔の母国においてもその内容の豊富さにおいてこの書ほどのものはまだ出版されていない。筆者の本論文における功績は概括して次の4点にあると思う。

- (1) キルケゴー尔の「日誌」その他の第1資料を中心として研究を進めたこと。
- (2) いわゆる「大地震の体験」が「何時」、「何」を内容として行われたかを明白にしたこと。
- (3) キルケゴー尔の1835年月1日の手記及び彼の処女作『いまなお生きるもののは手記より』の意義を本格的にとり上げたこと。
- (4) メーラーによる「ソクラテスのイロニー」とハーマンによる「キリスト教のユーモア」の結論をほり下げることによって「最も深刻にされたイロニーは最も深刻なユーモアに転じる」という見解に到達したことである。

しかしこの論文はその構成について一言すべきものがないではない。この大著の中には「註」としては適當と思われぬ多くの部分を含んで居り、また重複している部分も少くない。筆者が真に研究の本脈としたものを圧縮すれば全体の半量のものとなり、その方がその研究路線をはるかに鮮明にすることができたのではないかと思う。また筆者はキルケゴー尔の壮年期著作時代の作品を意図的に殆んどとり上げず、従来の研究者があまり手にしなかった第1資料に重点を置き過ぎた感じがする。たとえば『わが著作活動の視点』は青年期を経た壮年期の著作であるが、これにおける自己の著作評価の視点は壮年期に突然生れたものでなく青年期からの血脈をもっているはずである。少・青年期の資料を重んずるのは当然であるが、新しい照明を例えれば『わが著作活動の視点』、『人生行路の諸段階』などに与

キルケゴーの青年時代の研究

え、そこに示される精神上昇の段階を青年時代にも及ぼして、その源泉を見出すこともやはり重要な意味をもつのではないかと思う。従来の研究の限界はこの精神上昇の諸段階を図型化した点にある。これに新しい照明をあてて、そこから青年期の大秘密の意義を汲み出すことも大切であろう。

しかしこのことは本論文のもつ全体的価値を減じるものではない。要するにそれは手法の問題である。

本論文は全体として見て文学博士（慶應義塾大学）の称号を授与するに充分な価値あるものと判定する。

主査 慶應義塾大学教授 「倫理学」
橋 本 孝
副査 同 文学博士「哲 学」
松 本 正 夫
同 慶應義塾大学講師 文学博士「哲 学」
務 台 理 作